

幼少期の過酷な経験が成人期の疾病の高リスクと関連

日本とフィンランドにおいて、幼少期の過酷な経験が成人期の疾病と関連しているかについて横断的研究を実施し、比較検討した。

日本の成人 13,123 例(平均年齢 69.5 歳)とフィンランドの 10,353 例(平均年齢 64.4 歳)を対象に、幼少期の過酷な体験、すなわち両親の離婚、家庭内での恐怖(身体的虐待や家庭内暴力の目撃)、貧困の 3 項目と、現在の健康観や既往症(がん、心臓病、脳卒中、糖尿病)、喫煙歴、BMI との関連を質問票により調査した。結果、幼少期の過酷な経験の有無については、日本では 50%、フィンランドでは 37%の人が少なくとも 1 つ以上体験していた。日本、フィンランドとも、過酷な経験が多いほど健康観が有意に低く、オッズ比はそれぞれ 1.35、1.34 で両国とも同等であった。過酷な経験の数と既往症との間にも関連がみられ、過酷な経験が多いほどがんや心臓病、脳卒中、糖尿病の発症率が高く、喫煙経験者の割合も高く、BMI 高値との関連が強かった。

日本およびフィンランドにおいては、幼少期に過酷な経験をした人は成人期に健康観が低く、生活習慣病の有病率が高くなることが示された。

出典: British Medical Journal. Open. 2019 Aug 24;9(8): e024609.

doi: 10.1136/bmjopen-2018-024609.